

学校・家庭、そして地域社会へ 通信で『食』の大切さを伝えたい。

●愛知県一宮市立丹陽南小学校 佐々木 須万先生

第2回『育て！プリントコミュニケーション』コンクール(主催・理想教育財団)で、400通を超える応募作品の中から最優秀賞・理想教育財団賞を受賞したのは、愛知県一宮市立丹陽南小学校の食育広報紙『元気もりもり通信』です。

この通信は、いま大きな教育課題となっている食育をテーマに、すでに足掛け6年にわたって発行されている広報紙です。保護者の協力が欠かせない食育という分野で、通信がどのような役割を果たしているのか、『元気もりもり通信』の編集責任者、佐々木須万先生にお聞きしました。

食育に取り組む全国の仲間の一つのモデルプランに

一宮市は愛知県の西北部、木曾川をはさんで岐阜県に接する、人口約38万の田園都市です。温暖な気候・風土に恵まれ、伝統的に繊維産業の盛んな地域として知られています。

市内には、小学校42、中学校19があり、丹陽南小学校(内藤朝義校長)は学級数13、児童数308名、教職員数25名で運営されています。

さて今回、審査員の吉成勝好先生(全国新聞教育研究協議会顧問)が、入賞作品集の中で、「豊富なデータをもとに、また身近で取り組

みやすい具体策を示しながら、家庭を啓発していくという強い姿勢がうかがえる」

「内容の面からも形の面からも、同様な活動を行っている全国の仲間の一つのモデルを提供していると言えるだろう」

と記した食育広報紙『元気もりもり通信』。この通信の誕生は、愛知県教育委員会が平成13年度から実施した「楽しい子ども食育推進事業」がきっかけでした。

事業の目的は、偏った食事のとり方による生活習慣病の若年化や、食事を独りでとる「孤食」が子どもの心の育成に深く関わっていることか

ら、自ら「食」に対して関心を持ち、望ましい食生活について考える子どもを育成したいというもの。県内28の小学校に実践研究を委嘱して始まりましたが、その1校が丹陽南小学校でした。そこで、食育をテーマにした通信の制作を担当することになったのが、養護教諭の佐々木須万先生でした。

「子どもにとって大切なことは知識だけでなく、早寝早起きや朝食をとるといった生活リズム全般の中で食を考えること。健康に関わることも多いということで私が担当者になったと思います」



「今回の受賞で、他県の教育委員会の方からお問い合わせをいただいたり、たくさんの方の保護者の方や地域の方からもおめでとうと声をかけていただきました」と笑顔で語る佐々木先生。

食生活指針をもとに年間計画を作成 具体的にわかりやすい情報を

当時、生活科や総合学習などで食に関する授業が行われていたものの、現在のように『食育』が一般的ではありませんでした。

「具体的には、農林水産省・厚生労働省・文部科学省から平成12年に出された食生活指針をもとに、年間計画をたて、学校での食に関する活動を伝えていくことで、食育とは何かを、保護者に浸透させていこうと考えました」

初期の『元気もりもり通信』は別掲のような内容（第1号、5号）ですが、決して肩に力が入ったものではなく、具体的に平易。学校行事との関連で食育活動をわかりやすく伝えていきます。

用紙サイズはB4で片面、モノクロ1色で印刷されています。原稿は、パソコン（ワード）で作成。発行は月1回、年間11号を発行。

市内の小・中学校や地域にも配布 学校間の「コミュニケーション」も活発に

「子どもに手渡すときには、担任の先生から、わかりやすく説明を加えてもらうようにしました。これは現在も続いています」

第1号を発行してから4年目、平成16年度からは文部科学省指定食育推進事業研究委嘱の研究推進中心校となりました。翌年には市内の16小中学校に協力を依頼し、指導協力校としてのネットワークができました。

このことよって、これまで丹陽南小学校の児童（およびその保護者）に配布、公共施設5箇所、町内の回覧板に掲示されていた『元気もりもり通信』は、市内小中学校60校のすべてに配布されることになり、一挙に多くの人の目に触れる通信となったのです。

用紙サイズもA3へ。そしてカラーへと変化したのもこの時期です。

「それまでも掲示用にカラーは使いましたが、配布用はモノクロでした。サイズが大きくなって情報量も多くなりました」

研究推進校になった第1号（4頁参照）は、イラストや写真が効果的にレイアウトされ、内容も学校行事だけでなく一般性の高いものとなり、情報が飛躍的に高度になっています。

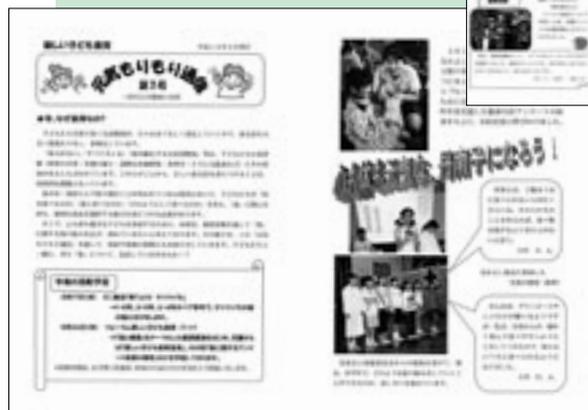
「テーマを探すのは相変わらずたいへんですが、常にアンテナをはり、食育関係の雑誌やインターネットからもヒントを見つけています」



●丹陽南小学校のホームページ (<http://www.school.city.ichinomiya.aichi.jp/~tannan-e/>) には、食育のページも設けられており、『元気もりもり通信』は平成16年度からのバックナンバーが掲載されている。



初期の『元気もりもり通信』
(1号・5号)



給食センターの管理栄養士の方の協力を得たり、協力の事例も順次掲載しています。

「協力校の試みを紹介することで、それが多くの学校に広がっていきます。他校との交流やコミュニケーションがあることで、いろいろな意味で広がりが出てきました」

平成17年度からは、広報部の先生3人が制作チームに加わり、おかげですごく楽に、そして楽しくなりましたと佐々木先生。企画会議は自然発生的に4人が集まって「これはどう」「これですべてみましょう」と決まっていこうと言います。

児童・保護者から多くの反響 食に対する意識に変化

こうした経緯で『元気もりもり通信』はつくられていますが、反響もたくさん届くようになっていきます。

「毎号、ファイルしているよといってくれる子どももいますし、読んでいますよと保護者の方からもよく声をかけていただきます。

食育とは何か知らなかったけど、大切なことだとわかった、こういう基本的なことを教えてもらってありがたい、という声も。

6年生のお母さんから、子どもにお味噌汁が辛い、塩分が濃すぎるから野菜をたくさん入れて具沢山にすれば、と言われたとか、食品の品質表示をよく見るようになりましたとか・・・そういう声を聞くと、多少なりとも広報紙が意識づけに役立っているのかな、と思います」

通信を家庭に持ち帰って親子で読んで欲しいという制作者のねらいが、見事に実現しています。

また、年度末には配布先の小中学校の先生方へのアンケートも実施。

「ほかの学校での取り組みがわかっていいとか、自分の学校でもこの取り組みはできそうなのでやってみたとか、さまざまな意見が寄せられます。今度はこういうことも載せてほしいという意見もいただきますね。本校だけの通信ではなくなっているの、反響はできるだけ紙面に反映させたいと考えています」

さまざまな教育効果が

教育的な効果も目に見えて上っているのと。

「各先生方が日ごろからきめ細やかに子どもたちに声をかけていることが成果につながっているのだと思いますが、たとえば、本校は長い間給食の食べ残しが多く市内の調査でも下位でした。

ところが、たとえば嫌いなものでも一口は食べるように、食事を作ってくれる人への感謝、野菜や魚などの命をいただく感謝などをずっと指導してきた結果、一昨年くらいから次第に食べ残しが減ってきました。とうとう昨年は年間の調査で市内トップになりました」

また、同校では、保護者の協力を得て1年生から調理を行ったり、キャンプの際も、自分たちで栽培した野菜を持って行き調理して食べて

『元気もりもり通信』（平成17年11月発行号）。レシピも掲載されているので、家庭でもつくってみることができる。



文部科学省指定食育推進事業研究委嘱の第1号



● 内藤朝義校長の話 食育に限らず他の分野でも『通信』によるネットワークの活用を期待

通信のメリットは継続して幅広く配布できることですね。食育のような生活全般に関わるテーマを推進するためには、単発の情報紙でなくこうした通信が効果的だと思います。

一宮市が食育に熱心であることも、この広報紙が長続きしている背景の一つですね。また、地域の方にもよくご協力いただいています。

昨年から、広報部で企画などを進めることになって、先生方のコミュニケーションも一層深くなりました。また、学校から発信する通信は公文書ですから、私ももちろんチェックしますが、多くの目で見るとは重要です。

内容については、現在の形が完全だというわけではありません。たとえば、これまで掲載した例では、「三角食べ」や「箸の使い方」などのように、どの先生でも簡単に指導ができるようなテーマをもっと組み込んでいければと考えています。

今、学校は大変忙しい状況にあります。本校では、食育をテーマにこうした試みをしていますが、たとえばいじめなど他のテーマでも同様の試みができるのではないのでしょうか。

ある学校が中心になって発信したものをほかの学校が利用する。そうした『通信』を活用したネットワークができればいいですね。

います。
「自分たちで獲った鱒も、子どもたちがさばきます。ニンジンやカボチャが嫌いな子どもも、また魚の嫌いな子どももきれいに食べます。野菜は自分が育てたんだという愛着や、魚をさばくという体験から感じ取るものもあるようで、それが食べるという行動に結びついていると思いますね」
さらに、同校では、朝食をとらない児童がほとんどいないとか。
「これからも食育広報紙が子どもの生活リズムを健全にするために役立っていけばと考えています」
さらに魅力ある広報紙をつくりたいと佐々木先生は意欲的でした。



自分たちで栽培し、収穫した野菜を学校やキャンプなどで調理する。

5年生のキャンプでの調理



4年生のジャガイモパーティー



3年生のナスの栽培